

る。このことが反面、研究会の性格を曖昧なものとする、ある種の危険性を有していることは否めない。しかし、私たち会員は、単にどれだけのことを知るか、ということだけではなく、「知」というものについて、深く考えようとする姿勢を忘れることなく、これら様々な問題と取組んでいる。同時に、私たちはこの姿勢を、難解な術語の羅列や、単なる抽象的な思考に終わらせるのではなく、どこまでも現実に根ざした営みとしなければならないと考えている。また各会は、会員の研究発表の場にとどまるのではなく、本会の成果を広く世に問うてゆく場でもあり、従って会員以外の方にも参加を呼びかけている。

さて、以上のような方針に基づき、11月9日、本会は第1回の大会並びに総会を開き、4年間の成果を問うた。発表内容は、文学から神話学、哲学まで多岐にわたり、発表者の顔ぶれも、卒業生・大学院生・教官と多彩であった。ここでは、これ以上詳しくこの大会の様相を述べることは、紙幅の都合上控えたいが、会員以外の方の出席も多くみられたことは、本会のあり方に充分応ずるものであり、また今後の本会の歩みを考える上からも、確かなものを残せたと思っている。

最後に、会報「比較文化研究」第3号を、このたび無事に発刊することができた。内容は、研究会活動報告・卒業論文概要・研究論文等から成っている。この会報によって、これまで述べてきた本会の活動が、具体的に理解して頂けるものと思う。一人でも多くの人の参同をお願いする次第である。

53年度生 地域文化 大村次郎

## 学問だけでは生きられない 人並み以上の体力つけよう

### 総科サッカー同好会

総科サッカー同好会は、現在マネージャーを含め、院生1人、4年2人、3年8人、2年7人、1年4人の総勢22人から成り立っている。メンバーのほとんどが他の同好会・クラブに二重在籍、あるいは三重在籍していたり、種々の運営機関に参加している。このことから、我が同好会にはより大きな視野を持ち、幅広い興味を示す。まさに総合科学的人物がそろっているとさえ言う。逆に言えば……（敢えて書かないでおこう）。とにかく、以上は我が同好会の特筆すべき特徴と言える。

同好会が、このようなメンバーによって構成され

ているため、ミーティング・練習・合宿・試合のどれをとっても、**全員がそろふことはまずない**。この点も、我が同好会の特筆すべき特徴と言える。メンバー間の連絡網が十分に整っていないせいもあるが、やはり多忙なメンバーが多いということが主な理由である。

さて、練習内容であるが、前期は週2回、7:30～8:30の早朝練習を行ってきた。しかし、朝はきついせい加人数が少なく（この点については、多忙が理由であるとは必ずしも言えぬと私は判断する）満足な練習が行なえたとはいえなかった。

また、秋休み直前に西条研修センターにおいて**2泊3日の合宿**を行ない、個人の体力向上、基礎技術の修得、フォーメーションの練習、チームワークの強化、及びメンバー間の親睦を目的とし、まずまずの成果は修められたと思われる。しかし、試験明けだけに、全員のなまりがひどく、初日の練習はかなりきつかったようだ。ただし、練習後、夕食時のビールは最高にうまかった。また、風呂での大狂演には、驚くべきものがあつた。

後期の練習は、大学祭での公開試合を始めとし、試合を中心とする予定である。**毎週、火曜または金曜の5時から、工学部グラウンドにおいて、練習試合**を行なうため、現在経済学部部のサッカー同好会と交渉中である。また、春休みには、集中練習及び合宿を計画している。

最後に、現在サッカー同好会では、**やる気のある人材を広く募集中**である。サッカー経験・技術の上手・下手は全く問わない。これからの時代は、学問だけでは生きていけない。健康な体、人並み以上の体力が必要となるだろう。昔の言葉で、文武両道である。来たるべき時代に備え、君もサッカー同好会で汗を流してみないか！

53年度生 情報行動科学 松浦正明



## ソフトボール大会始末記

# ＝頭脳とプレイに相関性をみた?!＝

先日、昭和55年11月30日、恒例の第10回総合科学部長杯争奪秋季ソフトボール大会が華々しく(?)行なわれました。日頃の運動不足の解消と学部内の親睦を深めるという目的(?)のもと、膚寒い風の吹く中、約200名もの参加者はグラウンド内を所狭しとはねまわって、日曜日だというのに大学は授業のある日よりも又一段と活気に満ちあふれていました。参加予定チーム16、内訳は、事務2チーム、院生1チーム、残り13チームが学部生という構成で、ただ1つ残念なのは教官チームの出場がなかったことです。さては春の大会での大敗に恐れをなしたのかなとも思いつつ、今回は必ず参加して頂けることを切望しています。



さて当日は朝8時50分の集合時間は予想通り守られませんでしたが、式部学部長をはじめとする、学活委員長代理、職員の方々はさすがにみごとな参集でありまして、我々学生も見習うべきだと言えましょう。学部長、学活委員長代理の粋な挨拶のおかげもあって、最初から和気あいあいと楽しく始まったのではありますが、試合の方はと言いますと……

試合形式は、4ブロック(ブロック戦の後、決勝トーナメント、敗者トーナメント)分割方式を採用し、最初から同学年があたらないようにも工夫したのですが、これがとんでもない結果を呼んでしまいました。なんと各ブロックの最下位は全て1年生で、彼らは予選の段階で賞品と縁がなくなりました。また、各ブロックの3位4チームのうち3チームまでが2年生となり、このことは共通一次試

験組の体力のなさを示したのではないかと思います(?)。ある3年生の話によると、「1年生は戦う前から負けてるね。勝とうという気迫が伝わってこないよ。」などとぬかしています。私は決してそうは思わないのですが、次回は是非とも頑張っ欲しいものです。式部学部長も言っておられました。「一に気力、二に体力、三・四がなくて、五に頭……」

さて、試合の結果は、優勝情報3・4年、2位事務A、3位地域2年、敗者特別賞情報2年という事で、また、今回特別に設けた応援賞は院生と1年3・7チューターに贈られました。全試合の終了後、別館食堂にて閉会式及び親睦会が行なわれ、ここでも会場のあちこちから笑い声がわきあがって楽しいうちに閉幕となり、我々世話人一同もほっと肩の荷をおろしたのです。

ところで、この大会も10回目を向かえ、ややマンネリ化してきたのではないかと思います。出場者の固定化とこの原因の1つになっているチーム数の制限や女子の参加問題等々。他の競技を希望している学生も多いようですし、次回の世話人の皆さんには、さらにより工夫をしてもらいたと思います。

追記：我々世話人のいたらぬ点を補完して下さった厚生補導の方々に厚く感謝すると共に、次回の世話人の方々の御健闘をお祈りします。

岡田大介



「ワシが取る!!」  
「イヤ ウチが取るんじゃけー。」

◎予選リーグ

○第1試合

A<sub>1</sub>  $\left\{ \begin{array}{l} 3 \\ 6 \end{array} \right.$  1・5チューター  
社会3・4年

B<sub>1</sub>  $\left\{ \begin{array}{l} 12 \\ 8 \end{array} \right.$  環境4年  
2・6チューター

C<sub>1</sub>  $\left\{ \begin{array}{l} 6 \\ 4 \end{array} \right.$  地域3・4年  
事務B

D<sub>1</sub>  $\left\{ \begin{array}{l} 3 \\ 8 \end{array} \right.$  社会2年  
情報3・4年

A<sub>2</sub>  $\left\{ \begin{array}{l} 3 \\ 7 \end{array} \right.$  環境2年  
院生

B<sub>2</sub>  $\left\{ \begin{array}{l} 2 \\ 3 \end{array} \right.$  情報2年  
環境3年

C<sub>2</sub>  $\left\{ \begin{array}{l} 4 \\ 6 \end{array} \right.$  4・8チューター  
地域2年

D<sub>2</sub>  $\left\{ \begin{array}{l} 6 \\ 1 \end{array} \right.$  事務A  
3・7チューター

○第2試合

A<sub>3</sub>  $\left\{ \begin{array}{l} 9 \\ 10 \end{array} \right.$  社会3・4年  
環境2年

B<sub>3</sub>  $\left\{ \begin{array}{l} 4 \\ 5 \end{array} \right.$  環境4年  
情報2年

C<sub>3</sub>  $\left\{ \begin{array}{l} 6 \\ 2 \end{array} \right.$  地域3・4年  
4・8チューター

D<sub>3</sub>  $\left\{ \begin{array}{l} 5 \\ 0 \end{array} \right.$  情報3・4年  
3・7チューター

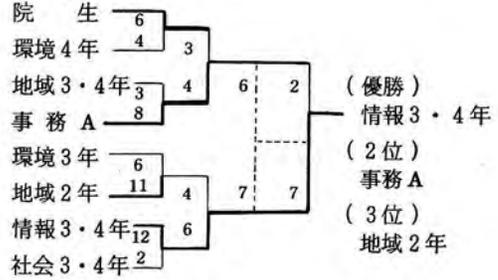
A<sub>4</sub>  $\left\{ \begin{array}{l} 3 \\ 3 \end{array} \right.$  1・5チューター  
院生

B<sub>4</sub>  $\left\{ \begin{array}{l} 4 \\ 11 \end{array} \right.$  2・6チューター  
環境3年

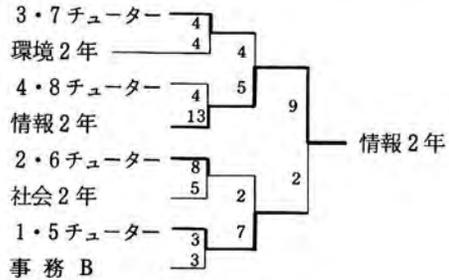
C<sub>4</sub>  $\left\{ \begin{array}{l} 6 \\ 8 \end{array} \right.$  事務B  
地域2年

D<sub>4</sub>  $\left\{ \begin{array}{l} 7 \\ 8 \end{array} \right.$  社会2年  
事務A

◎決勝トーナメント



◎敗者トーナメント



シリーズ・その12

# 学問のすすめ

仁 連 孝 昭



環境問題や資源問題を科学的に研究しようとする動きは現在でもまだ新しいものであるといわねばならず、未だその方法論や基礎的な理論が構築されているとは言えない。そこでこのような学問の発展段階の「前史」に滞

まっている分野でどのように研究を進めていくかという問題は、新しい分野で研究を進めようとしている者にとっていつも頭を悩ますものとなっている。こういう分野でいかに研究を進めていくか、幾つか思いつくままに書き記していくことにする。もちろん、これまでの短い経験を整理することはできない。それができる位なら、どのように研究を進めていくかで思い悩むこともないからである。

一つの研究方法として、これまで社会科学の分野で蓄積されてきた理論的成果を新しい分野に応用する方法がある。これは簡単なようで簡単ではないの

である。既存の理論がすぐに新しい分野（小生の研究課題としては環境問題、資源問題を水を対象に明らかにすること）に応用可能であったならば、すでにそれらの問題は理論化されていたはずである。そのような分野の問題がとりあげられず、理論化していなかったのは、理論と環境問題や資源問題との整合性がえられないことをしめしているのである。例えば、水に関していえば、水は経済財であるよりも自由財であるとして扱われてきた。経済財とは稀少な財貨であり、それがゆえに社会的な効用（欲求の充足）が最大になるように効率的に配分しなければならぬ財となり、効用の大きさを表わす支払い意志(willingness to pay)を代表する価格を通じて配分されなければならない財となる。しかし、水は自然がその供給者であり、土地のようにそれを排他的に所有することもできない。したがって、水の効用を受けとることに対して価格を支払う相手が存在しないのである。

水を経済財として扱う前提条件が欠けているがゆ

えに経済学は水を自由財として理論化の対象から外してきたのであった。だが、水が豊富で誰でも意のままに利用することができたかという、「水争い」という言葉が古くからあるように事実そうではない。だから、水は自由財なのではなく、水という資源の配分の理論として経済財の理論が妥当しないという方が真実であろう。

他方、現在では水資源不足が叫ばれる中で水を積極的に経済財として位置づけていこうとする考え方が主流になってきている。かつての経済理論家は理論の整合性を保つために慎重に水を経済財から外したのであるが、現在の理論家は逆に大胆に経済財の中に水を収めようとしているのである。もし水が経済財であるとすれば、現在支払っている価格よりも高い価格を支払おうとする者が現れれば、その新しい利用者に水という経済財は再配分されなければならない。そうだとすれば、自然的制約から工業部門よりも常に労働生産性の低い農業部門から工業部門へ水を再配分することが効率的な資源配分となる。あるいは、工業部門は農業部門より生産性の高い分だけ浪費的な水利用をすることが可能となるのである。なぜなら、工業部門の規模は水資源量の大きさによってだけ決まるのではなく、社会経済的な制約、土地資源、位置による制約、労働力による制約などを受けて決まるのである。したがって、農業部門を完全に駆逐し、工業部門で水資源を使い尽くし、工業部門間の競争により水資源生産性（水資源一単位当りの産出高）が上昇し、浪費的な水利用が阻止されるという事態には至らないのである。

このように考えてくると水を経済財とすることは、はなはだ不合理なこととなってくる。水は自由財でもなく、経済財でもない。それでは水は何なのか、経済学では水は扱うことができないのかという疑問の壁にぶち当たる。

この時、考え方の道筋を次のように変える必要がでてくる。すなわち、水の配分は人間社会によって制御可能であるとすれば、それを支配している論理があるはずであり、それを説明できない理論の方に責任があるとまずしなければならない。応々にしてあることだが、理論に合わないといって現実を非難してみてもはじまらないのである。そこで、こうなれば現実に頼るしかなくなるが、「事実は小説よりも奇なり」という言葉がしめすように、現実を理解することは大抵のことではない。やはり、何か羅針盤を持たなければならないのであるが、すでに今ま

での羅針盤は役に立たないことがわかっている。それは、全旅程を指ししめすものでなくても、部分的に旅程が明らかとなるものであればよい。経済学の中の諸分野における特殊な現象をこれまで扱った諸研究、隣接諸科学の成果がこの役目を果してくれることになる。

ここに学際的研究というもの位置づけられる。学際的研究といえはすぐに学際的な共同研究を思い浮べる人が多いかもしれないが、頼るべき理論のない分野では、まず個人が学際的に研究しなければならない。そのうえではじめて共同的な学際的研究が成り立つのである。また、インターディシプリナリーである前に、インターセクショナルでなければならないであろう。このセクションはディシプリンの中の細分野という意味で使うが、経済学では近代経済学とマルクス経済学という異なった分野の研究から同じく学ばなければならないであろう。両者を体系と見るならば互いに対立するものであるが、これまで認識されてこなかった対象を解明するためにその一般理論ではなく特殊理論を摂取することは必要な作業となるのである。もちろん一般理論の理解抜きに特殊理論を理解することは不可能であるが。

次に、環境問題や資源問題という、学問分野からいえば特殊な問題の研究では、その現実をつぶさにつかまえることから出発するという研究方法がある。これは、問題を各学問分野の枠組の中でだけとらえるという方法ではなく、対象が逆に学問を規定するという方法である。水問題は資源配分論の一部、公共投資論の一部、公益事業論の一部ではなく1つの水問題論なのである。水資源開発の問題、水利用の問題、汚染の問題、治水の問題これらは別個の問題ではなく、1つの水問題である。水利用があるから水資源の開発をしなければならないし、水も汚染する。また水利用のためには同時に治水もしなければならない。まずそれらの相互連関をつかまなければならないが、それを媒介しているのは人間活動である。人間活動なしに、水問題は成立しないのと同じく、人間活動の分析抜きに水問題論は成立しない。それでは、ここにおいて、人間活動の分析とは何を指すのであろうか。経済学の教えるところに依れば、人間活動は市場を通じて、交換を通じて互いに結びつけられている。だが、水問題においては、様々な水利用を通じて人間活動が結びつけられているのである。もちろん、経済学の教えることも事実であり、水問題の教えるところも事実である。そう